

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第 60 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 21 年 6 月 27 日 (土)  
午後 2 時～  
会 場 万代シルバーホテル  
5 階 万代の間

## I. 一 般 演 題

## 1 MDCT を用いた大動脈弓部および鎖骨下動脈近位分枝の分岐様式についての検討

木村 元政・矢島垂由美・奥山 幸介  
山本 功\*・松本 一則\*

新潟大学医学部保健学科  
立川総合病院放射線科\*

【目的】 咯血症例のうち、結核など肺尖部病変に対する塞栓術施行時に問題となる、最上肋間動脈および肋頸動脈(CC)に注目し、鎖骨下動脈近位分岐様式について検討した。

【方法】 対象は、2007 年 3 月～2008 年 1 月に頸部から頭蓋内動脈病変の評価目的に、造影 CT 検査を施行した 134 例である。CT 装置は東芝社製 64 列 MDCT Aquilion 64 で、3D 画像作成およびデータ解析には TeraRecon 社製 AquariusWS を用いた。

【結果】 1) 鎖骨下動脈近位分岐は、椎骨動脈(VA)、内胸動脈(ITA)の順に分岐するものが右では 60.2%、左では 50.8%と最も多かったが、次いで多かったのが、右では VA、甲状頸動脈(TC)の順、左では VA、CC の順であった。

2) 深頸動脈は、鎖骨下動脈から 4.9%、甲状頸動脈から 5.6%、胸部肋間動脈から 1.9%が分岐していた。

【結語】 鎖骨下動脈近位分岐では、分岐様式に左

右差があり、肋頸動脈の分岐位置も異なっていた。最上肋間動脈は 10%以上の症例では単独で分岐していた。

## 2 気管支動脈瘤を合併した気管支動脈蔓状血管腫に対し、動脈塞栓術を施行した 1 例

高野 徹・堀井 陽祐・堀 祐郎  
吉村 宣彦・佐藤 章子\*・大井 博之\*\*  
江部 祐輔\*\*\*・佐藤 和弘\*\*\*  
新潟大学医歯学総合病院放射線科  
県立中央病院放射線科\*  
長岡中央総合病院放射線科\*\*  
長岡赤十字病院呼吸器内科\*\*\*

症例は 64 歳、女性。誘因なく咯血し、他院に救急搬送。CT で両側気管支動脈の著明な拡張と両側気管支動脈瘤を認め、右肺には血液の吸い込みがみられた。気管支動脈蔓状血管腫で右肺が出血源と考えた。止血剤で制御できず当院呼吸器内科に転院し 1 回目の気管支動脈塞栓術で右気管支動脈を気管支動脈瘤の近位で塞栓するも、翌日再咯血。再度気管支動脈塞栓術施行。再咯血や動脈瘤破裂のリスクも考え両側気管支動脈を塞栓した。塞栓後発熱がみられたが、咯血は認めず、良好な経過がえられた。

## 3 食餌性イレウスの 3 例

羽根田 淳・森田 哲郎・清野 康夫  
中川 範夫・太田 篤・塚原 明弘\*  
県立新発田病院  
同 外科\*

食餌性イレウス 3 症例を経験した。症例は 50 代から 70 代のいずれも女性であった。イレウスの原因となった食物は、椎茸、餅、梅の実であった。CT では、いずれも小腸拡張の末端に嵌頓する構造物として認められた。椎茸は豊富な空気濃度を含む構造物として、餅は高吸収に、梅の実は中心に高吸収部分を伴う球状の構造物として描出された。1 例のみ手術が施行され、他は保存的に治療された。イレウスの CT 画像において、閉塞部を